Series

連載
Series

東日本大震災｜連続ルポ2｜仮すまいの姿
Great East Japan Earthquake｜Serial Report 2｜Life in Temporary Housing ── no.19

仮設住宅試行──フクシマトクシマの会

Temporary-Housing Trial──Fukushima-Tokushima no Kai

内野輝明
Teruaki Uchino

建築家／1963年生まれ。大阪工業大学卒業

3.11から2カ月後の2011年5月12日、JIA全国支部長会の被災地視察に参加、仙台から気仙沼まで北上して、南三陸町、仙台市南部までを見て回り、TVには映らない匂いや絶望感を現地で体験する。翌日秋田で開催されたJIA東北支部総会では、福島地域会がそのときまさに取り組んでいた福島県木造仮設住宅についての報告を聞いた。阪神・淡路大震災以来問題とされてきた、コミュニティ問題の改善、生活の質の向上を目指して、表に出ない黒子として木造仮設住宅に取り組んでおり、「福島から仮設住宅の概念を変えたい」という強い意思を持って、会員一丸となって充実した毎日を送っているとのことであった。徳島から参加していた私は総会後、地域会長との縁から福島地域会の懇親会にまぎれこんだ。皆さんから個々に、より詳しい福島の現状をお聞きして、被災した福島の支援と未被災地徳島の備えのための情報交換の場として「フクシマトクシマの会」設立を提案する。帰徳後ただちにウェブ上に「フクシマトクシマの会」ブログを開設、徳島からは気になる情報や防災への取組み、福島からは仮設住宅用地決定までの困難な様子など、生の情報をお互いにアップし始めた。

その後、以前から相談を受けていた、バス会社のドライバーのための単身者寮建設用地を見る。クライアントは2階建てのアパートのようなものを想定していた。しかし、夜行バスなどで激務をこなすドライバーを癒す単身者寮は、上質な最小限住宅であるべきではないか? 緑に囲まれた日当たりのよい高台を見て、「徳島にもいずれ起こる大災害への備えのため、ここで仮設住宅の試行をさせてもらえませんか?」と提案。その場で同意していただいて、「仮設住宅試行」プロジェクトがスタートした。

お盆には福島地域会長の来徳に合わせて、四国支部四県のJIA会員、学会員の他、関東甲信越、東北、北陸からも有志が集まった。東北の現況、福島の木造仮設住宅のその後、コミュニティを大切にした単体計画、配置計画などの報告をお聞きする。信頼を勝ち得た彼らはもはや黒子ではなく、多くの仮設団地の配置計画などを次々とこなしていた。その後はみんなで阿波踊りをみて、一緒に踊る。祭はいいな。仲間と踊るひとときは、混迷を深める福島の災害をひと時忘れさせてくれた、と。

基本計画-I提出。「一戸一戸の建築の中身もさることながら、人と人の交わりを誘発する『配置』がとても重要である」。お盆の報告会で教わったことを踏まえて、樹のまわりに集い住む「風社配置」を提案(風車ではなく風社。「社」には人が集まるという意味もある)。

4戸1組の風社が2組で計8戸、8人用の単身者寮計画となる。中央に植わる樹(欅)は、被災地以外の支援者が寄贈する。義捐金よりも目に見えて、具体的に被災者と支援者の交流のきっかけとなる支援にならないか。樹を寄贈した人はまた、野菜やお菓子を送ったり、手紙を書いたり。被災者は、遠くで自分たちを見守ってくれる人たちをいつも感じて暮らす。樹の周りに集い住んでいる、目の前にいる人たちと、その周りのいくつもの風社で暮らす仲間と、目の前にいなくても心でつながっている人たちとのそれぞれの距離感を感じながら。

UIA2011東京大会に集まった仲間で「フクシマトクシマの会」懇親会開催。フクシマのメンバーはUIA大会での「原発問題タブー」の空気に煮え切らない気持ちを吐露しながらも、同席したトクシマの建築士会の若者たちと意気投合する。徳島県南の美波町職員からの、震災への備え意識の上がらない町民に向けた被災体験報告を中心とした講演会の依頼に、「未被災地の礎になることがわれわれの役目です」と、快諾。翌年1月の防災シンポジウム開催が決まる。10月、仮設住宅試行地鎮祭を執り行う。11月、現地説明会開催。多くの業者に参加してもら

図1｜手前が欅を中心とした4戸1組の風社、右奥がファミリータイプ全景

図2｜風社の中庭。欅ごしに向かい合う

図3 | シェアリビングを持つ「とも暮らし」案

うことで「備え意識」がより広く伝播することを願って、普段から付き合いのある工務店7社に集ってもらい、プロジェクトのこれまでの経緯、意義を説明する。

同月、フクシマ復興支援会議開催(福島市)。全国各地から有志が参加。三春町の工務店集団とJIAが連携して、プレハブ協会がやらない不整形で高低差のある小さな土地につくった木造仮設住宅等数例が紹介された。さらに「仮設住宅その後」として、仮設住宅から復興住宅への木材再利用の提案や、放射能汚染で余儀なくされる2地域居住と避難者の移動に関する提案が示された。フクシマの場合どこへ復興住宅をつくるのか? など。

基本計画-IIへ。復興支援会議で学んだことを計画に反映してみる。構法として採用している杉板落とし込みによる「板倉構法」は解体、再建が容易である。四戸一の風社配置を一戸一戸に解体して改築バリエーションを検討し、それらをあらためて2戸、3戸組み合わせることで復興住宅をつくることができるのではないか。役目を果たした仮設住宅をその後払い下げることを前提にすれば、当初の仮設住宅のグレードをさらに上げることも考えられる。風社1組4戸と三戸一のファミリータイプ1戸に計画変更が決まる。

2012年1月、被災者である宮城と福島の建築家計3名が来徳して、2日連続で防災シンポジウム開催。初日は県南の美波町、2日目は徳島市内で。震災体験とその後の建築家活動を報告。想定を超えた災害への備えの重要性を訴える。2月、上棟式+上棟構造見学会開催。徳島県の方、美波町の方、林業関係者、施工者、設計者、一般の方、マスコミと、多くの方に神事にご参加いただいて、上棟を祝う。

4月、完成見学会、説明会開催。「仮設住宅」という名称が、こういう住宅のあり方を制限していないか。緊急住宅としてはどうか。この住宅群を、「EH-J 内原の風社」(Emergency House-JAPAN 地名+建築名)と命名する。緊急住宅に風土性を、住む人に誇りを持ってもらいたい。入りたいと思ってほしい。各地でいろんなEH-Jを考えておけたら。施工者、職人さんたち、市民、みんなが自分の地域のEH-Jをあらかじめ知っておき、模型を見て図面を読んでおくことで備え意識を維持する。一度に大量の材料を揃えるには製材した木材の備蓄が不可欠になる。県下で建つ木造建築の1年間分の材料をいったん備蓄できれば、翌年からは良質な乾燥材としてそれを使っていける。いつも1年分は備蓄できている。発災したらそれを緊急住宅に回せる。公的な資金でこのサイクルを動かし始められたら、荒廃した山の再生にもつながる。小さなプロジェクトから大きなうねりへ……。

その後の展開と課題など

良質な最小限住宅としての社員寮は、良好な住み心地でドライバーの方々には非常に好評。温熱環境の測定など、今後は数値的検証も行っていく予定。昨年からはこのプロジェクトの途中から興味を持って見守ってくださっていた行政の方と、未被災地における先行高地移転のプロジェクトが始まっている。大きな土木工事を必要としない「斜面地に集住する」木造建築群プロジェクトは、今年度、実施設計、建設へと準備中。そこでは、実際に被災して工場も加工場もないなかで、職人技術と道具箱さえあれば建設可能な、より普遍的な家づくりに戻って考えてみようとしている。

内原の風社のファミリータイプを、良質で安価な木造住宅として建てたいという依頼が県外からある。また、リタイア後の単身の方々や友人たちと集い住む「とも暮らし」に、風社が使えないだろうかという相談がある。ひとつ屋根の下ではないが、適当な距離感を持って他人同士が集住するのにこの風社配置の距離感が適しているのではないかと。4戸同タイプから、そのうちの1戸をシェアキッチンにして、あとの3戸も入居する人のスタイルに合わせるなど、あらたな展開を検討し始めているところだ。

仮設住宅試行を通じて実感したのは、図面や文章だけでなく、実際に建設されることの力。見て、中に入って触れることはもちろん、新聞やTVに取り上げられることでも市民の意識に残り、自分たちの防災を考える契機になる。行政はそれを取り入れて咀嚼し、あらたな公共福祉に展開していくことを考える。プロジェクトが完成するごとに、またその次の動機を産んでゆく。この連鎖が広がっていくことを願う。